

パックス・シニカとは何か

中 川 学

今回の一橋大学公開講座の共通論題は「アジア/混沌と秩序」、そして今日のテーマは「中華、華僑、華人の『華』とは何か/多元的価値を統合する理念と現実」です。わかりやすく言えば「パックス・シニカとは何か」ということになるでしょう。中華的世界の二大中心である中国大陆と台湾から海外へ移動した中国人がその行く先の土地に仮住まいを続けられ「華僑」となり、そこに定住して現地国籍を取得すれば「華人」となり、その子孫を「華裔」と呼ぶこともあります。このように空間的に拡張し時間的に継続して識別のよすがとされる「華」の字の意味内容についてみなさんと一緒に考えてみたいと思います。ご参考までに配布した「第一二回世界客大会の情報解析序説」(『一橋論叢』一一三巻六号、

一九九五年六月)で問題にした「中華人民共和国」と「中華民国」の祖国統一の話も、「中華は一つ」と割り切ってしまうえば超政治的な統合が見えてくるのではないでしょう。北京政府が統一の方式として「一国両制」を提案しても台北政府はなかなか同意せず、台北が「中華民国」を明言すれば北京は「二つの中国」の謀略と批判してなかなか譲ろうとしません。

このような対立は、宇宙的精神に生きる地球人類という観点から眺めれば、あたかも牆にせめぐ兄弟の姿を見るようで胸が痛みます。「国」という形式を越えた中華的世界を築き上げてきた文化伝統に根ざして考えれば、論理的には「一華両制」という統合の姿も構想できるわけ、そのような視座に立てばおよそ国境などに束縛さ

れない「一華多制」という、超国家的で、抽象的には無限に多元的な価値統合も可能となるのです。もっともその場合には、華僑・華人が経済の大部分を運営しているインドネシアなどのように反華運動が起こる事態もあり、そう簡単には割り切れないところにこの地球社会の難しさがあるようです。「国」という概念が、ヨーロッパ史における「国家」という観念や制度と同じなのかどうかという問題は、比較国制史の専門家が一生がかりで取組むような大テーマですから、ここでは深入りしないことにします。

しかしながら、ごく一般的に、憲法を中心とする法律制度によって、領土と国民を明確に定義しつつ法治システムが日常的に機能するのが近代西欧の国家であるとするならば、中華の世界は「天下」という全地球的な範囲にわたって「天子」が支配し、天子の一族が「王」としてそれぞれの「国」を統治するのであり、その場合の「国」は国家領土を意味する領域概念ではなく、「王」の統治拠点としての軍事祭祀都市を意味していました。春秋戦国時代から秦・漢統一帝国の形成過程において確立してきた中国的支配システムについては、東京大学の西

嶋定生名誉教授の『中国古代の社会と経済』（歴史学選書、東京大学出版会、一九八一年初版）や一橋大学の増淵龍夫名誉教授の『中国古代の社会と国家』（弘文堂、一九六〇年初版）を参照してください。自分個人の作業仮説として平たく言えば、西欧の法治システムの歴史的な前提となった「王権神授説」に対応させて、中華の世界の統治システムの出発点は「王権天授説」であったと考えるのです。なお、マスメディアの論調では、よく「人治主義」という表現が使われますが、これは西洋近代の民主的な法治主義を価値基準として、それとの比較において遅れた非合理的なシステムという意味で用いられており、内在的な理解を妨げる誤解のもととなっています。これに対して、最近、東京大学の溝口雄三名誉教授、村田雄二郎助教授、伊東貫之助手の共著『中国という視座』（これからの世理史4、平凡社、一九九五年六月初版）が「礼治システム」という概念を提示しています。歴史学と哲学の観点から打ち出された確かな視座であると考えます。そのほかに、自分個人の作業仮説としては、「民治システム」という概念をたてています。

さて、一神教のヨーロッパや西アジア世界とは異なり、

東アジアに生まれた中華的世界の「天」なるものは、唯一絶対の人格神といった存在ではなく、自然そのものなのです。「天」という普遍的な意思をもつ存在が、太陽系の一つの惑星である地球において、自然環境として具現している現象形態のことを「天下」と称するのです。

むかしから、普天の下、卒土の浜、いづれ王土に非ざる無し、と言います。つまり、この地球のすべての環境の中で、陸地が果てる海辺の水際まで、あらゆる土地は「王」のものなのだ、ということです。では、「王」とは何でしょうか。それは、天子の分身として自分に「封」としてゆだねられた土地を統べ、そこに住む人民を治める責任者ということなのです。中国語で「封建」という場合、ヨーロッパ流のフェューダリズムではなく、天子から与えられた封土の王による分治を意味します。

天意を受けて天子が世界を支配し、天子の一族がそれぞれの封土を分担して統治するために「国」を構えたのですが、その統治にあたっては常に天意に従わなければなりません。では、どのようにして天意を確かめたのでしょうか。それは統治のための技術としての「工」と「巫」の助けをかりて行われました。「工」とい

う漢字は、天を意味する上の「一」と、地を意味する下の「一」が縦一本の直線で結ばれています。これが工学や技術を意味する漢字「工」の抽象的構造ですが、その意味は、天地のエネルギーを活性化する人間の営みであると同時に、その営みを支える定規や縄墨をも表すとされていきます。

このことは諸橋轍次博士の『大漢和辞典』(大修館書店)にも出ていますが、個人的解釈を加えるなら、定規とコンパスを駆使する技術者集団の仕事を反映するものなのであり、西アジアや北アフリカ、地中海世界から中世ヨーロッパにいたる石工組合と地続きの問題を含んでいると考えられます。まさに前近代の実務的メーソンから近代の象徴的メーソンにいたるフリーメーソンリーの世界史にもつながる奥行き深い研究課題が潜んでいるのです。中国最古の伝説で、日本のイザナギ、イザナミに当たる伏羲と女媧の手には、メーソンの定規とコンパスが握りしめられていました。その謎を解き、神秘的な要素を伴う墨子の技術者集団の実体にも迫るような今後の人類史研究に期待したいものです。それは、人類の手にする技術とは何か、人工と自然との調和を実現する道

は何か、という問いに答える作業となるのでしょうか。

ところで、「工」は「巫」に通じます。いまでも香港、台湾や、マレーシア華人社会などで週末の夜に秘かに行われている「フーチー占い」では、古来の漢字「巫」さながらの儀式によって天意を伺っているのです。文字通り「T」の字のような棒の水平軸の左右両端を「人」と表された二人の占いがそれぞれ握り合って坐り、床に置かれた砂盤にT字棒の下端を乗せてお祈りを始めます。そのうちに天の意思が波動として占いに伝わり、二人の手が激しく震え、T字棒の振動が砂盤を掻き散らし、文字ともつかぬ記しが刻みつけられていきます。それを書記が解読し、天意を読み取るわけです。日本民俗の例では、コックリサンみたいなものです。もっとも、近頃では、オーム真理教のような組織も現れて、天意による「預言」を実行すると称する科学技術者集団が暴走するようになり、困ったことだと思ひながら、東アジアの「巫」の伝統との歴史的因縁を顧みないわけには行きません。

たとえば聖徳太子の事跡を顧みるにつけ、個人的仮説なのですが、隋の煬帝と対決できた背景には、朝鮮半島

の花郎を中心とする巫人集団との連帯による自信が何われ、隋から唐にかけて、東アジア世界における中華的秩序は分裂の危機に瀕していたのではないかと推測されるのです。いわゆる隋唐世界帝国が、中華的統一原理による世界支配の絶頂期を迎えた西暦七、八世紀の東アジアにおいて、大和朝廷の日本は、中華の天子の分身としての「王」であることに終止符を打ち、「漢委奴国王」「女王卑弥呼」「倭五王」のような封建的な分権統治の地域代表であることをやめて、聖徳太子のもとに新たな天下の独立を宣言したのではなかったのでしょうか。あたかも大英帝国から独立したアメリカ合衆国のように、日本合衆国としての東アジア諸民族連邦が大いなる調和を意味する「大和」の旗印をかかげてナラに出現したのではないのでしょうか。中華的な世界支配の原理、いいかえればパックス・シニカの統治技術は、もともと天とのコミュニケーション技術に基礎を置くものであり、それは古代においては「工」の原点にある「巫」の天との直接対話技術にほかならなかったのですが、そのハイテク・センターが、大陸、半島、列島に分極化し、世界が「混沌」の時代を迎えることになったのではないのでしょうか。

天との対話が、すべての人類に平等に開かれたものであるとすれば、この「混沌」こそは真の「秩序」を生み出すための、再編の一步であったのかもしれない。

ここで忘れてはならない研究業績として、東京大学の西嶋定生名誉教授のもう一冊の近著『中国史を学ぶということ／わたくしと古代史』（吉川弘文館、一九九五年）を挙げる必要があります。ここでは、その「Ⅱ 古代史と歴史認識 付論 中国史の特質」並びに「Ⅲ 東アジア世界と日本」（一七〇—二五〇ページ）にもとづき、今日のテーマに沿って問題をまとめてみます。教授の中華的世界論は、中華思想、王化思想、冊封体制の三つの要素が一組になって展開されるのですが、今日の話題に即して略述するなら、西暦七世紀から九世紀にかけて、中国、朝鮮、日本、ベトナムにくりひろげられた東アジア世界の中華的冊封体制は、すでに六世紀、日本が朝貢方式へ移行した頃から破綻をきたし、唐王朝の末期には崩壊していました。その後、宋王朝は北方の契丹と並んで共に「皇帝」と称し、中華的世界の天子のポジションを辛うじて維持したものの、間もなく、宋皇帝が兄、契丹皇帝が弟となり、次いで、女真族の金皇帝が伯、宋皇

帝が姪となり、続く南宋では金が宋を冊封して臣従させるにいたったのです。この、混沌のさなかに、朱子学という中華思想と王化思想の原点が形成されてきます。

西嶋教授が指摘されるように、西暦十世紀からモンゴルの元朝支配の十四世紀までは、中華と夷狄の主従関係が逆転したり喪失した時代でありました。これは漢民族を中心とする中華的世界（バックス・シニカ）にとつては大変な「混沌」を意味しました。このアイデンティティの危機を迎えて、儒教、道教、仏教という伝統思想を統合し、中華の文化体系を再編成する努力が実り、朱子学が生まれました。そして、中華的価値体系を否定するモンゴルの侵略に対抗して、南宋の宰相・文天祥は、朱子学を思想的な武器とし、華南の山間地帯に陣取り、その一体に結集していた漢民族の移住民と現地地の少数諸民族を糾合して奮戦しました。ついに敗退したものの、この抗元闘争は中華的文化体系の新生を促し、その担い手としての「客家」のエスニック・グループとしての自立を華南の山間地帯において加速しました。

漢字文化と朱子学を振りかざす客家の文人・読書人たちは、元朝打倒の勢いに乗じて科擧の高級官僚登用試験

に挑み、漢民族王朝として再建された明朝の支配者集団に躍り出ることとなりました。このようにして復活した明朝の中華的世界は、東アジアにおける冊封体制の復興につとめ、混沌とした倭寇に対処して勘合貿易制度を導入し室町幕府を従属させたのです。西嶋教授が指摘されたように、西暦一四〇六年、足利將軍義満は、永楽帝の冊封を受けて「日本国王」として臣従の礼をとりました。さらに豊臣秀吉も、このシステムに無知のまま臣従し、後に真実を知って激怒し朝鮮出兵を試みたものの、朝鮮との冊封による安全保障の盟約によって出兵した明の大軍に撃破されてしまったのです。明の時代において中華思想は朱子学から陽明学へ発展しましたが、引き続きその忠実な実践者として客家の官僚層が活躍しました。その意味で、中華の客家は近世日本の風上に位置していたのであり、逆に、日本側からすれば直視したくない一種のタブーとなったのではないのでしょうか。

近代の清朝打倒の太平天国運動から辛亥革命を経て、中華民国が形成され、さらに中華人民共和国の建国にいたるまでの歴史過程において、客家が活躍したことは繰り返すまでもありませんが、十九路軍をはじめとする最

強の抗日部隊が客家の精鋭であった事実を忘れてはなりません。清朝の初代駐日公使・黄遵憲、孫文、詩人歴史家の郭沫若、廖承志はじめ多くの親日家が客家であると同時に、対日批判の最前線に光る客家の眼差しにも意を留めておきたいと考えます。

以上のような中華的世界の秩序は、天下や国家の支配と統治にかかわるシステムのことであり、「制度的秩序」のことであったと言えます。いわばマクロなバックス・シニカの歴史を瞥見したわけです。ところが、日常茶飯のミクロ・レベルにおいても、バックス・シニカの風俗、習慣、飲食、儀礼の現象形態が存続しており、日本への影響はもとより、世界中のチャイナタウンでも脈々と躍動しています。むしろ、バックス・シニカは、そのマクロ・レベルで崩壊の危機に瀕し、何度も消滅しかけたにもかかわらず、その混沌のなかで同質の秩序を再生し、新たな歴史状況に適応して蘇るにいたった根底には、ミクロ・レベルでの民俗的な習俗と民間秩序があったからなのではないのでしょうか。その問題については、前述の増淵龍夫教授の一連の研究が明らかにしていますので、ここでは繰り返しません。教授の他界された後

に提起された課題の一つを簡単に検討してみます。

それはハーヴァード大学の張光直教授の名著『古代中国社会—美術・神話・祭祀—』(伊藤清司・森雅子・市瀬智紀訳、東方書店、一九九四年初版)による新しい問題提起なのです。ハーヴァードの考古学教室での教授のセミナーに一九七七年秋学期に参加させていただいた者の一人として、この新著は何度も読み返し、学問の奥の深さを噛みしめています。要するに、支配や統治の源泉は、天意を確かに受け止めた証拠を示すことであり、誰もがかなわないと認識するに足るソフトとハードの証明を質量共に揃えてみせることなのだ、ということに尽きるようです。かつて、秦・漢統一帝国の国家体制と民間秩序をめぐる西嶋・増淵論争が華やかなりし頃、ゼミの顧炎武読書会のあとで増淵教授がひとこと「あの殷の青銅器のことが解らないとなあ」と呟かれました。その時は、これも独善的な個人的解釈で、先史時代の宇宙人の仕事かもしれないのだから解らなくても仕方がないのではないかなあ、などと自分に言い聞かせ、目をつぶって済ませたつもりでした。ところが、張教授のような中華の究極の砦を引き受ける学者が粘って頑張ったあげく、

ついに謎を解く鍵を見つけてしまったようなのです。

詳しいことは、同書を読んでいただくほかありませんが、ここでは自分個人の理解による張氏仮説を要約しておきます。すなわち、王権天授説の中華世界では、支配や統治の権限は天から授けられるものであり、誰が授けられるのかは、受ける側の徳の大きさによって決定される。徳の大きい者はおのずから豊かな富をもうけ、その富によって天意を証明するであろう。容易には製造できない青銅器を無数に拵え、その表面には滅多なことでは聴取させてもらえない天意を解読の至難な文字で打刻する。そのような天意のヒアリングを専門とする「巫」の大集団を独占し、その表現形態を具象化するためのエンジニアリングを担当する「工」のテクノクラートを奴隷として従える。このような地上での準備を整えた上で、天の意思をいつでもどこでも聴取し感受できるシステムをこの地球の全域すなわち「天下」に張りめぐらせる。こうしたグローバルなアンテナに対して、天は珍しい花を咲かせたり、気高い鳥を飛ばせたりして「天子」への支持をほのめかし、あるいは大地震や大洪水を起こしたりして警告を発して見せる。それらを見抜くのが「巫」

の役割であり、対処するのが「工」の仕事なのだ、ということになるようです。

このようなアンテナを具備できてはじめて「天子」となるわけで、それは政治用語に置き換えれば原初の「權威」を授けられたこととなります。「権(仮)の威敵」なので、本物の威敵を備えた「天」から見れば、その天子が、虎の威を借りた孤になるか狼に化けるのか、嚴重に觀察しなければなりません。その上で、一族に分権して「王」を立て「封建」するのですが、それぞれの「国」の「王」に与えられるのは、天子の權威を限定して分けられた力、すなわち「権限」であり、仮(権)の力としての「権力」にすぎないのです。しかも、王はその国の立地する領域も不確定な地域の人民によって、朝な夕なに「月旦」という人物評価にさらされます。その評価が駄目だとすれば、王位を退くほかなく、結局は天の意に代わる民の意に従わざるを得なくなるのです。その意味で、中華的世界の「王権天授説」は、その本質において「王権民授説」に限りなく近づき、「民治システム」という独特の「民主主義」を日常化させることとなります。これは、近代西欧のデモクラシーとはどこか異

なり、政治というものの本質をとことんまで追究した発想なのではないでしょうか。

張教授によれば、中華的世界においては「政治的權威」がすべてに優先したのであり、古代中国における政治的權威の成立を「鼎」をはじめとする青銅器の文化人類学的考察によって明らかにすることができたのです。ここでも再び増淵教授の講義が思い起こされます。それは、あのカール・ウィットフォーゲルの「水の理論」にまつわる話なのですが、『一橋論叢』(四二巻四号、一九五九年十月)に「K・A・ウィットフォーゲル著『東洋的デスポティズム―全体主義国家権力の比較研究』と題する書評を寄稿するように命ぜられ、原稿を持って荻窪のお宅へ参上した時のことです。その年の東洋経済史の講義ではウィットフォーゲル流の地理的決定論を批判し、大きな河川の水利土木的管理による農業生産がアジアの専制主義と停滞の原因であるといった見方を乗り越えるにはどうすればよいか、という議論を展開しておられたのですが、さはさりながら、ウィットフォーゲルが何もかも間違っているわけではない、少なくとも、秦の統一過程をよく見れば、山林藪沢を囲い込み、そこに水

利農耕を起こして帝室財政基盤を確立し、獸の皮や骨で武器を作り、全国統一の準備を固めたことは事実なのだから、と述べられたのです。その頃、教授は、東京教育大学の木村正雄教授と協力して、権力基盤となった水利耕地の実証研究に取り組んでおられたのです。

ところが、張教授の前掲邦訳書一九八ページには次のように書かれています。

「ここではただ国家権力の主要な基盤としての河川管理理論は、三代に関する考古学からはそれを支持する根拠を見出せないことを述べるに止めておこう。〔実際〕

河川管理に関しては古代中国の考古学的資料、もしくは刻字資料の上では顕著ではない。すなわち、権力のメカニズムは「河川管理以外の」他の領域で展開したのである。」と。

また、一九一ページでは次のように論じています。

「文明は、集積した富の体現化されたものである。古代中国においては、富は主に政治権力によって獲得されたが、それと同時に「富は」政治権力を入手し、維持するための必要条件でもあった。支配者たちはまず政治的権威を確立することによって、初めてその政治権力を行

使することができたのである。」と。

長々と引用する時間はありませんので結論を申します。これも自分個人の仮説ですが、ヘビースモーカーの増淵教授が紫煙のかなたに見出そうとして徹夜を重ねられた、あの山林藪沢の中に、実はもう一つの「富」の実体が潜んでいたのです。それは、岩塩でもあったでしょうが、それ以上に、金属であり、銅と錫、亜鉛、鉄、そして金、銀、水銀の類であったに違いありません。困い込まれた鉱山の地下にもぐって金属を掘りだし、沢の水で洗っては精練して鼎をはじめとする祭祀のための青銅器を铸造し、政治的権威を確立するに足る「天意」のメッセージを刻印し、それにふさわしい難解な文字を作り、その解釈と解読の権限を独占することのできた「天子」が支配者になったのです。その一族は「王」となりまた奴隷をも服属させて王を支え、そのノウハウを独占し、新たな山林藪沢を求めて広大な大陸を移動し、開発して歩きまわったのでありましょう。西アジアの石工が結社の秘密を厳守したがゆえに敵対する諸国を自由に移動しながら宮殿を築き、伽藍を造営したのと同じように、「王」とその同族のものは家父長を絶対視する儒教道徳を形成し

一致団結して一族の富を維持することに努めました。

数千年を経て、どういいうわけか、天の配剤で華南山間地帯に集中する鉱物資源の豊かな鉱脈を掘り当てた人達は、移住民の客家とよばれながら黙々として石炭を掘り、鉄を探り、相互扶助の労働組合までも形成するにいたっていたのでしよう。その組合は地上の防衛組織も持ち、後に孫文の辛亥革命に合流する秘密結社の源流を形成していました。洪秀全の太平天国軍も、広西省と湖南省の省境の山間部で軍勢を増強しましたが、その大部分がこの一帯の秘密結社に結集した鉱山労働者であったことを京都大学の宮崎市定名誉教授が明らかにされました。その関係者がほとんどすべて客家であることは、いまでは常識となつていますが、自分個人の調査過程で目から鱗が落ちる想いをした事実を一つだけお伝えしておきます。それは、一九七三年の正月初めのことでした。文部省派遣の短期在外研究のために東南アジアの客家会館を歴訪した後、客家出身の女流作家ハンズーン女史を訪ねて、チューリッヒへ飛び、列車とバスを乗り継いでアルプスの東端の山腹にあるフリムス・ドルフの山荘へ行った時の話です。女史は、周恩来総理夫妻と親交があつて聞い

たことなのだが、とことわって、毛沢東主席が革命の旗揚げをした井岡山は住民全員が客家人だったそうですよ、と教えて下さったので、帰国後、調べたところ、毛主席を井岡山へ案内した青年も、広州の農民運動講習所での客家の学生であつたし、山にたどり着いて親しくなつた山賊の親分、王佐と袁文才も客家で、彼らから学んだゲリラ戦法が共産党を勝利に導いた、ということもわかつてきました。

いまでは、毛沢東も客家の出身である、ということが取り沙汰されて物議をかもしているようですが、それは客家を特別扱いする差別的な歴史観に引きずられているからそうなるのであつて、実際には、漢民族を中核としながら、少数諸民族とも通婚しあつて中華的理念を信じ、家父長的な宗法秩序と漢字文化を守り通してきたエスニック・チャイニーズの中華史の問題なのです。(追記/この講座の記録をまとめていた六月二十九日の『産経新聞』朝刊に「神にかく上げ毛沢東!?!」神社「出現、当局は慌てて規制」という面白い記事が載りました。どうやら、明治神宮も顔負けの広大な廟が湖南省の山中に造られ、周恩来や朱徳(客家)も一緒にまつられている



写真 1 シンガポール最大の質屋(当)「恒生当」。左がポーンショップ、右は宝飾品の小売部。全国62店の質屋のうち59店が客家の経営。商工銀行や吉宝銀行と連携して世界のゴールド・ビジネスに参画。質物は24Kと22Kの純金のみ。恒生当の何吉昌会長は全国質屋組合会長と南洋客属総会会長を兼ね第12回世界客家大会へシンガポール代表団の団長として参加した。

(中川写す)

ようです。全国各地から多い日には四、五万人が参拝、門前町ができるほどのにぎわいで、当局が慌てて参拝と宿泊を禁止したというこ
とです。このような混沌こそが中華的な秩序
の生命力を物語っていて、当局には申しわけ
ないけれども中華の魅力となっているのでは
ないでしょうか。

どうやら一般論と抽象的なお話が長くなっ
てしまいました。せっかくの土曜日の昼下がり
に、ご退屈さまで終わってしまったのでは
申しわけありませんので、後半は具体的な現
状報告をさせていただきます。OHPをご覧
いただきながら、回覧用の写真アルバムなど
にもお目通しください。

報告その一。中華の政治的権威を支えた鉞
山開発のその後について。写真1のように、
現在のシンガポールでは、庶民金融の花形で
ある質屋さんが大いに繁盛しています。掘っ
て掘ってまた掘って、華僑客家の鉞山労働者
は、東南アジアの錫鉞山と金鉞を掘り、カリ



写真 2 福建省永定県古竹郷高北村の承啓楼。世界最大の円形土楼で、江ファミリー 320 人が 256 室に住む。築後 286 年。
(中川写す)

フォルニアのゴールドラッシュに馳せ参じました。明治日本の開国を迫ったフリーメイソンのペルリ提督も、別に日本征服の謀略のもとに来日したわけではなく、米国の金鉱開発と大陸横断鉄道やニューヨークの地下鉄建設のための土木工事を急ぐために、その道の世界的権威である中国と交渉し、現場の労働者を低賃金で雇い、西海岸へ急送する任務を帯びてやって来たのです。長い太平洋航路を確保するための食料と燃料の補給のために日本へ寄港したのが本来の意図でした。もともとアメリカは中国最良というか、歴史コンプレックスで中国と仲良くつきあいたいと切望しており、日本がブロックしたり介入したりすると過剰反応的に不快の念を表明する傾向があります。その逆鱗に触れた悲劇の宰相・田中角栄の事例を持ち出すまでもなく、ご明察の通りなのです。いま、米中台のかけひきがしきりに行われていますが、このところはアメリカ在住の客家とその結社で、チャイニーズ・フリーメイソンとして知られる致公会などに任せておいて、日本は宇宙的精神で地球環境の未来に責任を果たす事業を優先させるに越したことはありません。客家は、世界のゴールド・ビジネスをアジアにおいて独占的

に取りしきっており、その仕事はロスチャイルド財閥並びにオッペンハイマー財閥などと緊密に連係して進められているのですから、純金の経済価値を理解できるリーダーたちは、この質屋で取り引きされる質物がすべて二四金と二二金に限られていることの意味について、謙虚に勉強する必要があります。

報告その二。パックス・シニカを維持した原動力は、祖先を大切にし、家族を重んじ、核家族の連合としての宗族の相互扶助システムを継承発展させてきたことであると考えます。昨一九九五年一二月、広東省梅州市での

世界客族第一二回懇親大会に参加の後、華南山間地帯の客家集落を歴訪し、悪路に阻まれながらようやくたどり着いた福建省永定県の承啓楼という円形と方形の集合住宅の様子を、写真でご覧ください。三百人以上の宗族ファミリーがこの集合住宅のなかで三百年近くもくらしてきたという事実には、共同体の信頼と安堵の「民治システム」が息づいていること、そして、それが百年千年の歴史的な積み重ねによる「礼治システム」の成果でもあることを実感させられました。

(一橋大学教授)